糸うた　壽本

特259
526

始

特259
526

萩乃家たけ次選

續編 葉うた 寄本

板元 光陽堂

波志可記

本多に疲せる小袖幕し
酒あらで何で己がさくらかな
その文様乃浮出す謡
粋な書手にきそはれて
衣装を自慢乃ふしまわし
さらりなかるさらうづきに
花が散りたむ花見ざけ
夏は涼み乃月うけて
玉の腕乃ばち乃さへ
額に靭氣の錬の寄
絃の音色に志ぶいの声
冬は雪見のつれ引に
二人でのぞくうたひふ爰
其衣も麻し 業うた集
四季を集めし 花のうた
粋な袖嚢の玉手箱

癸亥初夏

柳翠老人

萩家
たけ次さんに

板元 光陽堂

特259
526

自一至七	〆ざし芸
八	高砂 初音聞かせて 一夜明ければ
九	梅にも春 うす墨 老すてう
一〇	梅と松とや むさしの 夕暮 露は尾花
一一	我もの 雪の巴 枯野 春柳
一二	宇治茶 金時 秋の夜
一三	虫ば玉川 玉来ずば 紀伊国
一四	綱と
一五	花の曇り 萩桔梗 川竹
一六	ほうもり 君ぶ恋路 書き送る 与夜舟
一八	春雨 わーゐに 一播
一九	御所車 新寮 引案して
二〇	辻君 ほれて通ふ あわ雪 住よし
二一	時雨降る いたさ
二二	柳桜うら 無れ無光き 上り下り 弓張月
二三	京の四季 淀の川瀬
二四	お互に 浮気同士 雨の降る夜
二五	二人が仲 清くとも にくらしい
二六	本調 うそと浮世 粋ふ 口舌して
二七	浮草 湖島令一播 そもく梅の木 めぐる日
二八	長き夜乃 白むずは
二九	菊てようよう 春菜ふいとそ 梅が来しあう 秋の野に
三〇	うつくしと 櫻見もうて もの衣も
三一	お若と一生 鶯の身は 月秋をすゝ 鴛鴦 月あかり

三七	三六	三五	三四	三三	三二
時鳥自由 田舎作り 心で見て 十月遊びすて	鳥のかげ 青月雨や窓た 葉 [illegible]	注のさつき 鳥啼きでも 安つみや寄の 島 [illegible]	竹に雀 送る玉章 竹にあふたや 卯の花	秋の七草 秋ざくら 八重一重 [illegible]	浮名立てじと 更けて逢ふ秋 鶯の名 [illegible]
四三	四二	四一	四〇	三九	三八
とうぞ叶へて 来いと云ならて おらが国にも	越後の国 柳々で まわどい遊び	元日や 勇ましや 華の 宵の口 [illegible]	ゆうべの風呂 晴れて雲間 二人ヶ仲お月様 田舎作り	散りもせず 紅葉の橋 青雨や池の	社頭の松 海浜の松 柱たて
四九	四八	四七	四六	四五	四四
山姥	老松	時は今 [illegible]川や [illegible]田の 時 [illegible]	ひふぶり 猪があやふぞ 風に根 むつそし	よしのの山 舟やうき雨 秋のさ 菜の花	酒と女 嵯峨の秋 橋本へ

調子の印
本調子
二上り
三下り
六下り

札ぎしき

初春や門に松竹伊勢海老や〆も橙々
うらら白の鳥追万歳もうららかに悪魔払い
の獅子舞やはづむ手まりに拍子をつく
羽子つくそで一イ二ウ三四ツ世の中よいよ豊
いつも変らぬのしほんぶ

〽あづのきみ代(よ)のとこの寝(ね)ふねの皆(みな)目出(めで)度(た)き福(ふく)
寿(じゅ)集(あつ)まるさゝ事(ごと)よホンに目出(めで)度(た)い春(はる)遊(あそ)び
〽あづのきみ代(よ)の宝(たから)船(ふね)ながく初(はつ)ひゝるふく寿(じゅ)集(あつ)まる
さゝ事(ごと)よホンに目出(めで)度(た)い春(はる)遊(あそ)び
〽蓬(ほう)莱(らい)まるおさまる御(み)代(よ)にて末(すゑ)かけて友白髪(ともしらが)
迄(まで)契(ちぎ)りしに朝(あさ)日(ひ)に匂(にほ)ふ鶴(つ)亀(かめ)の祝(いは)ふ年(とし)

ホンぞ目出(めで)たけれ
〽千(ち)代(よ)うけて君(きみ)とし祝(いは)ひ立(たて)烏(ゑ)帽(ぼ)子(し)キリヽと
シャンと風(かざ)折(おり)烏(ゑ)帽(ぼ)子(し)右(みぎ)折(おり)烏(ゑ)帽(ぼ)子(し)左(ひだり)
折(おり)させてかづくのおめでたや
〽松(まつ)の太(た)夫(ゆう)のうちかけは蔦(つた)の模様(もやう)に藤(ふじ)色(いろ)の
ゆかし一(か)の愛(あ)いもみんなし男(おとこ)は偶(いろはう)りぢやもの

晴れて逢ふ日を松の色

中に緑のしをらしさの姫小松二階三階

五葉の松いく代かさねむ千代見草

岩越す波に鶴亀の日の出千代に八千代

に目出度けれ

梅のかず〳〵指折り添へてかぞへ数ふる

手まり梅

桃は初心に柳はませた風のまに〳〵

解けかゝるコチヤ海棠の蕾花

花が咲きや黄金の花がでんちなら今

をさかりと咲き匂ふ でもさつても見事な

黄金花

花の色香はゝいろうは櫻 姿優しやホラ〳〵と
二重の帯をキリヽヤシヤンと縁結びおちや
目元の可愛らし

青簾声音にひゞく尺八のゆかしき
色や紫キリヽとしめた印籠のさくら
まばゆき高蒔繪

風かほる袂も輕き夏衣干すてふ色と
うたふうき岸の卯の花咲くにつけ初音
またるゝ時鳥

うつら〳〵とまつ夜の長さ空一聲
時鳥駒形あたり君は今

關や離れて綾瀬口 丑田の森たし横に

見(み)て越(こ)ゆる間(ま)もなく堀切(ほりきり)の咲(さ)くや与(よ)
作(さく)のはや免草(くさ)

夏(なつ)の夕暮(ゆうぐれ)山々(やまやま)と見渡(みわた)せば折(をり)しも松風(まつかぜ)に
青葉(あをば)涼(すゞ)しく吹(ふ)き誘(さそ)ふハラクハット鳥(とり)の
群居(むれゐ)る時月(つき)なそはつも一時雨(ひとしぐれ)さても面白(おもしろ)や

香水(かうすい)のかほり床(ゆか)しき鬢(びん)の毛(け)をかき上(あ)げ
しまく横櫛(よこぐし)のさすや窓(まど)もる月(つき)の影(かげ)

棹(さほ)させば舟(ふね)は思(おも)ひの岸(きし)につくおもかじ
取(と)楫(かぢ)手(て)くだはなれどなせた届(とゞ)かぬ我(わ)が思(おも)ひ

忍(しの)ぶ文字(もじ)すら乱(みだ)るゝ雁(かり)の玉章(たまづさ)に便(たよ)りをと
聞(き)かん封(ふう)じ目(め)のきろの渡(わた)しに棹(さほ)さす舟(ふね)の
以ち越(こ)へたなやら衣紋坂(えもんざか)見世(みせ)素(す)が垣(かき)に引(ひ)き

寄せかへて調ぐ床しき浮草や
思ひは祢ざしの伊勢なる大船川崎音頭
くちしに

夕立や田にも三めぐりの神ならば葛西
太郎の洗ひ鯉さへがホウじて狐けんホンニ
全盛に事ぢや堀の船宿呼子鳥

何だし網浪浮気面誰まりて契をかわ
しても色かへて日影に朝顔の花のから
の寝乱れし枕恥かし辛気らし

蓮の葉に溜りし水は釈迦の涙か有難や
処へ蛙がヒヨコと出て来れ吏はわたしの恋で候
聴る暑さしのぶんと大門口のたそがれや

いざ鈴虫を思ひ出す 虫の聲々可愛らし
嵐散らで主さんに逢ふて 生仲様
知らむ恥かしいぞは ないかいな
秋の七草尾花に聞けば 萩と野菊の
仲もよく アレ 女郎花かるかやの 丸い頭の
藤袴 味な桔梗だやないかいな

文の便りに今宵おんすと その噂いつの
寝白も主さんに 帰る番な事だやがひよく
紋離れし無仲だやと 志めんがへ添ふ縁組
おもしいや
夫をうたがふ事かくな さらと柳にや
しやん世 思ひ廻せば 昔なつか

〽派出に由良さん手の鳴る方へ　とらまへて
酒にしよう　とらまへて　サヽ呑ましよ　藝子お
やまに手をとりかはし　思はず九太夫に抱き
つきて　粗相に由良さんぢや
〽繰返し〳〵　又くり返し〳〵
しどけなりぞい　賤の小田巻

〽色みて　誰の傾城も進ふ人を逢ひ
見その後は思ひにくらぶ山

端唄

〽高砂や此浦船に帆を上げて　月諸
共に出汐の波の淡路の島影や　遠く鳴
尾の沖過ぎて　早住の江につきにけり

〽初音聞かせて春告げ鳥や人の心も
白梅のかをりとましく嬉しき声に進れつゝぬり
たれ思の浮世浮世の思か一寸一筆懸想ぶみ
〽一夜明ければ又気も変る花の盛りは梅屋
敷初音一聲鶯のホウホケケウの約束は
實に嬉しいじゃないかいな

〽梅も春の色添へて若水も車井
の音もせはしき鳥追や朝日に繁き人影
もしやと思ふ思ひの慾宝音神楽のうかれ
に待つ辻占やねつみ鳴き逢ふて嬉しき
さゝきげん
〽寿墨で書く玉章にも思ひして雁啼き

渡る宵闇月影あらで主さん違えて愚痴に
畳ざん思ひ廻してまたあらぬ早く苦界を[illegible]

逢すてふ身は浮舟のやる瀬なや波のまにまに
寄る漁り火に燃ゆる思ひのくるしさ消ゆる
命を察しやんせ世を宇治川の網代木や
水にせかれてこがるるわいな

梅と松とや若竹の手に手引かれて
〆飾りあるばうれしやなじみのほんだわら
海老の腰とや千代迄も共にしらが
ヨーイ〱世の中ヨイ霞へゆづり葉に
テモマア明けましてお目出度い春ぢやへ

武蔵野の桔梗かるかや女郎花招く尾花

浮か〳〵と月も心で思ひ定め何のきて宿らん露のうへ

〽夕暮に眺め見わたせば墨田川月に風情を待乳山帆かけた船が見ゆる哉アレ鳥が啼く鳥の名も都に名所があるといふ

〽露は尾花と寝たと云ふ尾花は露と寝ぬと云ふアレ寝たと云ふ寝ぬと云ふ尾花が穂に出てひらきました

〽我が物と思へば軽し傘の雪恋の重荷を肩にかけ妹がり行けば冬の夜の川風寒く千鳥啼く待つ身につらき置炬燵實にやるせがないわいな

〽雪は巴に降りしきる屏風が恋の仲立

蝶々千鳥に三つふとん元木へ帰る塒鳥
まゝ口が青いじやないかいな
「枯野ゆくしき墨田堤心もすゆる
夜半の月田面うつる人影パツト立つた
はアレ雁金の鳴くおとづれ
「青柳に影誰やら居るわいな人じや
ぜゝぬ朧月夜の影ほろゝし
「宇治は茶所様々に噂の大吉山と
人の気に合ふ水にあふ色も香もよいの
思ふ同士粋に浮世野暮らしい
コチヤく濃い茶の仲ぢやもの
「金時がく熊をとらまへてまさかり持つて

富士や裾野は松林義経弁慶渡邉
の綱唐の大将なりやまらせ神宮皇后武
内の臣軍人形のよなりしちまき菖蒲刀やなりや兜草

秋の夜は長いものをまんまるな月見る人の
心も更けて待てども来ぬ人の音づる
ものは鐘計りかぞふる指の寝つ起きつ

わしや照らされて居るわいな

逢ばたまは闇とお前に延つて二階せうなしで忍
逢ふ夜は夢さへそふみ寝の枕言葉やないかいな

玉川の水にさらせし雪の肌積る口説の
其内に解けし島田のもつれ髪思ひ出
さずに忘れずに又来る春を待つぞいな

君来ずは閨へいらじ柴の戸さし出て
帰りかけては縁の橋端の燈砧もてくる
風の訪るるのそぞろなれば我ならぬ外に影ぞなき
槍はさびても名は錆びぬ昔忘れぬ
落し差し　エサーサヨイ〳〵ヨイヤサ
紀伊の国は音無川の水上に立たせ給ふは
船玉山　船玉十二社大明神　さて東国に到
りては玉姫稲荷が三囲へ狐の嫁入りお荷
物をかつぎは強力稲荷様の頼みは田町の
袖摺りもさしづめ今宵は待上﨟仲人は
先づ先真黒黒助稲荷につままれて
子まで生したる信田妻

綱は上意を蒙つて羅生門こそ着きにける
折しも雨風はげしき後より兜の錣をし
引つかみ引戻さんと突く引く綱も聞えたる
強者まで彼の曲者に諸手をかけしよりや
膂やぶる錣が切れる錣切れるは厭はぬ
甘茶がたつた今抜ける鬢の毛が損じるわ
損じるは七ツ過ぎには行かねばならぬそれへゆ
かんすや ホツちやや気にかゝる 誰じやく
鬼じや曲ものの人じやもの兜も錣も何にも
いらねへサーサーサ 持つてけ精買つてけ
花の雲か東山の雲か花かい白雪乃中
をそよく 吹く春風に浮寝誘ふやさゞ

文のおとはかも兎も都鳥扇拍子はえん
ざわざわうちね床しきらおぞゆかしさ
〽萩桔梗中に玉章忍ばせて月を野末
に草の露君をまつ虫夜毎にすだく
更け行く鐘に雁の声恋はおうしたものかな
〽川竹の浮名を流す鳥さへも番ひ離れぬ

鴛鴦のつがひ中に立つ月すご〳〵と明けの辛さ
に袖しぼるホンニ辛気な事じゃいな
〽蝙蝠の出て来て浜の夕涼み川風サット
吹く牡丹 からげた仕掛の色男いきなせな
〽いつ迄も浪花の水にうつる姿絵
〽忍ぶ恋路は さて果敢なさよ今度逢ふのが

命がけ汚ずも涙を白粉の笑顔かくす無理な酒
〽書き送る文も志どろふき神奈川の臺で寝
よその沖越えて岩にせかれて散る波の雪か
みぞれか霙か雪か解けて波路の二つど
妻を恋しと志たうて暮れてへ
〽上り夜船のかひじやろじやとて楫を取って

エヽおもかぢじや取楫じやさだめや枚方淀
水に車がくるくると伏見へ着くエオーイ
おやじどの其の金コッチへ貸してくれ與市兵ヱビックリ
仰天しイエイエ金じやおさんせぬ娘化粧すりや
狐が覗く賽の河原の地蔵菩薩一つとせ一夜
明ければ賑かでくお飾をたてた松一木変らぬ

色の世界色世帯もつはわしとお母さんと
糸取て暮らさば東上総のいちみの郷村の
小舟をばかり沖に見ゆるは肥後様の
エーそれそれ舟の紋は九ツ九曜の星
蝶々いやなものなら菜の葉がいやならあの此
先一寸とまりもあれ止まらんせ

春雨シッポリ濡るゝ鶯の羽風に匂ふ梅ヶ
枝の花にたわむれしほらしや小鳥でさえも
一筋にねぐら定めぬ気はひとつわたしや
鶯主は梅やがて身まゝ気まゝになるな
らばサア鶯宿梅じやないかいなサアサ何でもよいわいな

わしがサ国サで見せたいものは昔や谷風

今伊達模様ゆかしなつかし宮城野
信夫浮きもいぞへ松島はなるゝなんぞのへ
一声は月が啼いたか時鳥いつしか白む短
夜にまだ寝もやらぬ手枕や男心はむごらしい
女心はそうじゃないかた時逢はねばくよ〳〵せ
愚痴な様たが泣いて居るわいな

御所車

かゝる迷ひ梅が軒端匂ひ鳥花に逢瀬を
待つと夜の明けて嬉しき懸想文開く初音も
恥かしくまた解けかぬる寿氷雪に思ひ
を深草も百夜も通ふ恋の闇君が情を
かり寝の床の枕さびしく夜もすがら

紫の結び目固き縁の糸解けぬ心も色も
深緑待つこ来ぬ夜は袖の先恨み重ねし言ひ掛け色
も硯の海へはまる程深い浅いは客と間夫
苦労するのも男ゆへ

紅葉して昔ながらの小倉山君の御幸を
待つわいな木でさへあく迄何れなほそ

辻君の手へ無流れの思ひ川逢瀬は細る柳
影しば止めたき三ヶ月も櫛の胸へ小夜
風にサラリと解けし洗ひ髪結んで清き水の音

惚れて通ふる何辛の誘ふ今宵も逢ふと暗
の小道を只一つ先さ程も思ひや世甚しれ
コチヤ上つて見ん山坂越て逢ひに行く

泡雪消ゆる汝身の思ひ寝に浮臥しを厭ふ
恋の仲乱れしまゝ乃鬢付も義理と
いふ字は是非もなく夢か現かなき烏

住吉の岸にひとを待つ我が身にて久しくなき
滝の水絶へず逢瀬を松の葉乃色変らぬ
と心の丈を明かして結ぶ妹背仲さてもよく
　ヨイヤサ

時雨降るなきおヶ原乃夕暮ニ鴛ニ鴦
雁の便り待つ身乃うやつらや恋の浮橋
中絶へてやる瀬涙やもつれ髪いふた
いはぬ無胸の内思ひやつたがよいわいな

潮来出島乃まこもの中であやめ咲く
とは志ほらしや　ア、ヨイヤサ

宇治の柴舟早瀬を渡るわいな
君故のぼる舟アヽヨイヤサ〳〵
花は色々五色に咲けど主に見かへ
返る花はない　アヽヨイヤサ〳〵
花を一もと忘れて来たが後で咲く
やら開くやら　アヽヨイヤサ〳〵

柳橋から小舟で急がせ山谷堀土手の相
傘片身かわりの夕時雨君と思へば
逢ふは嬉しがまたぞへどうして今日は
御前さんとそう云ふ初音を聞きに来た
濡れて逢ふ先の浮名たつすゝきは露を恋慕ふ
夫婦仲を意地悪な風が邪魔してチラ〳〵と

落ちて恥し月のかげ

上り下りもおつな馬さへさても見事な手綱染
うたふ馬子唄の其高輪で鈴も便りに

小室節
坂は照る照る鈴鹿は曇るあひの土山雨が降る
書けば二階がぬけしかし舞の子の振袖で

弓張月の昇日
影清き通ふに振りて忍んで
聞けば沖津白波立田山夜半は君が来るかに

春は花いざ見にごんせ東山色香競ふ
夜桜や浮かれて粋も無粋も物がたき
二本差しても柔らかに祇園豆腐の二軒茶屋
みそぎぞ夏はうち連れて河原に集ふ夕涼み
真葛ヶ原にそよそよと秋は色増す華頂山
時雨を厭ふ傘にぬれて紅葉の長楽寺

思ひぞ積る円山今朝来て見れば雪見酒
それで櫓の竿向ひ　ヨイ〳〵〳〵　ヨイヤサ
〽淀の川瀬の十景色あれた引いてのばやし
三十石舟清き流れを汲む水車巡る間毎
澪目覚えさ以た盃杉さえて助かれ寄ふ伏
見へた巻綱をほうした霧が千両松　ヨイ〳〵　ヨイ〳〵

〽紫ゆく里に似たる若き初音にホノ〳〵先る
鶯の声にほだされ志縁の糸老ゆ手の三筋立
花の袖に春風さ厳ふそ着すじやあ以かひ
〽粋な互に知らぬが花を世間の人に知れるや
互に身のつまさあとも御前に情たて
惚れたが無理つく　ションガイナ〳〵

〽浮気同志が遂ならなくて、アーでもないと四畳半
湯のたぎるも音もなく アレ聞かしやんせ松の風

〽雨の降る夜はたゞしんしんと心淋しき
閨の内果敢なき恋のやる瀬なやまたに浮世
まゝならぬ思ひ焦して更け渡る エヽ憎らしい
女夫雁らつらつらと夜をひの寿

〽天が仲は宵の内にゑびす大根大二天恵と
情けと義理と寄せ三ツの御山は熊野山
浅間ケ岳は浄瑠理で反魂香に仇文句愛宕は
愛嬌守利神出雲は御存じ縁結び涼みに
木船お前の山にいゝお出島はつくだぶし富岡には
岩清水洲崎に弁天芸者の守護神帰命

頂禮大菩薩風にもなびく柳島にや烏がうたふ天
淺くも共に清き流れのかきつばた飛んで行來の
編笠を覗いて來たか濡れつばめ顔が見たくば世はかいな
憎らしい憎らしい仕打を虫が好く意見
志らず程增す思ひ花を愛て嵐を憎む
氣遣ひで通ふも私ぞえ苦勞する氣に成るわいな

紫の由縁の色やかきつばた染めて生仲
くゝしと明け暮れ案じて暮す〳〵
うそと誠の二瀬川たまさかぬ氣で騙さ
れて末は野とならば山となれわ志が思ひは
君故ならば三又川の舟の内心のたけを御察志
拗ねて浮世を恋故に野暮な苦勞も心柄梅ヶ香

添ふ春風二枚屏風をおしへだて朧
月夜のうすはの忍びくて相惚れの口舌
の床の涙雨池の蛙も夜もすがら声に泣いては
口舌して思ひせぬ空寝入奥の座敷の
つれ引に常中たちて夫あるに乱れ髪の子
のぞし八幡鐘の後朝に別れとしらぬや送り船

〽浮草や今日は向ふの岸に咲く流れ次第
や風次第さらさらは誘ふ水とてもなくもせで
〽時鳥今一声の聞きうずはし月は有明なごりが
見えず集まりつたれ何としらず辛気臭いぢやあるかいな
〽そもそも松の大木を臼となし其の枝々を杵となす
臼と杵とは女夫仲陰陽和合を寿きて餅

をつくなぞ目出度けれ

巡る日の春に近いそ老木の梅も若やぎて候しほらしやしほらしい香り床しと

待ちわびつゝ寝てサヽ啼きつける鶯の来る度

朝寝と起しけるさうぞ来みじかゝる

今帯〆て行くわいな法ホケキョウと云人さんずや

長き夜の遠の寝ぶりの皆目覚波のり

舟の音のよきかなと下から読んでも長き夜の

遠の寝ぶりの皆目覚波のり船の音の

よきかな　正月二日の初夢に

そもやそも武不二の白妙と申すは昔し

駿河の国三保の浦に白龍と云ふ漁夫天人

と夫婦にあり其の天乙女の乳房より流れ出
たる色を見て作りし酒あり故に夫々
どうしたへ　ナニ第一寿命の薬ですなはちや
東方朔は此酒を八盃呑んで八千年まだ浦島は
三盃呑んで三千年三浦の大助百六ツオ、さつても
てもさつてもこれ寿命の長いは不二の白酒

兼ねてよくどき上手と知りあひの手が
しれた唐繻子の帯が解けて憎らしいから
てたぼかくつげの櫛　キワト　辻占る引く
許り　ホンにやる瀬がないわいな

色気ないとて苦にせまいもの賤が伏屋に月も
さす見やれ藪にも花が咲く田植戻りに袖つま

引けれ今宵逢ふと目つつのひた招き合図の小室
節すゝきに残る露の玉ゆしと遠んだかい無理の宴

梅が主しある柳がわたし仲のよいのか焦らすのか
ならぬ秋ひそかた山の月心して吹け小夜嵐

秋の野に出て七草見れば サアヤレ 露で小褄
か濡れる サアヨイ してもよんな 鬼なき姿

うつらうつらと寝た頃たゝく柴の戸誰ぞと
問へども答もせずもしや夫かと胸さわぎ
寒も嵐か木枯しか主しぢゃないか
ゆめうつゝ千睡つた夢のまくら

さくら見とても花をつけてまず朝桜夕桜
まいの秋ざくらの間夫のひるじゃとて千どうあと

首尾そばのうんせ何時じゃひけ過ぎじゃ
たそやあんどうチラリホロリ鉄棒しく
〽色の名も云ひ処しーんと山吹のあだくと露ふ
も粋の仲水に流すかわいや気にかゝる
何を蛙がくどくどしとおしにおちおちと云ふもの
はやる瀬ないので御座んすわいな

〽お前と一生暮すあの深山の奥のわび住
居柴かる手業糸くるま細谷川の
布さらし縫ひ針仕事いとやせぬ
〽鶯の身はさかさまに初音も籠たてさせて
青木町コヽがのんどのからかんと道を急いそら吹見草
〽月夜烏にふと目を覚まし逢ひたさ焦れったた

に無理な事云ふてわしや神かけの逢ひた
い病はかんせふ乃せいか酒でまぎらかせ苦界や

鶏が聲鐘の音さへ身にしみていとゞ淋しき
閨の内待つ身は辛きひとり枕思ひ出すも時鳥

月夜の逢ひ見ればおぼろ綱の舟の内仇に
二人爪引きた忍び逢ふ首尾の松

浮名たてじと口先でわざとけなしてある時い
胸でのろけて知らぬ顔噂するさへあらば
ホンにうるさい人のくち

更けて逢ふ夜の気苦労は人目をつねて
桜咲高見ぬ顔と顔目に持つ涙袖の袂
其千意地悪き人の要心話す話も後や先

〽春は賑ふ隅田の景色植ゑ込む松も色増
して梅の香りのホンノリと仇な櫻に恋の淵流
流るゝ水鳥に今はわこし乃女夫つれ

〽鶯乃さゝ啼き初むる小柴垣色も香も
なる愛嬌にほだされて咲き冬の梅思ひの
たけを手忘れ早く初音を待つ許り

〽秋の七草虫の音に残る螢が身を焦がす
君を松虫鳴く音に細る思ひと云ふ字が大切じや

〽夜櫻や浮れ烏が毎々夜花の木陰に誰や
らん居るさいさい気ずけしやんすな芽ふき柳が
風にもまれてフウワリ〱とオーサそうじやわいさ〱

〽八重一重山も朧に薄化粧娘さかりの

ちらば櫻嵐に散らで主さんに逢ふて
生中後にやむ恥かしいぞはないかいな

土手節

折る山野の草深けれど君が住家と思へば
よしや玉のうてなも思ふて御座るとその身
目も厭ふ主しぢやにお笑ひやるな君のために

竹に雀はしなよく止まる止めて止まらぬ色の
みちわけし許りは情たてて思ふ男乃つまさ
あきら　ヨイ〳〵〳〵　ヨイヤサ　そりへ

送る玉章心の文で逢ふて今宵は
思積る雪が降るか東風吹くか可愛い
可愛いの忍び寝の枕ひびく遠砧

竹にあるたけや　さゝ竹元は尺八中は
笛末はそもじの筆の軸思ひまゐらせ
候かしく　そうかいな

垣根卯之花時鳥一聲啼いて聞かせ
ほ　音づれせいかなぶし　あかどうじゃいな
嬉しじゃいな　アノナマ　どうじゃいな

淀の車は水故廻るわしやしや悋氣で廻るか
流れる　ホンニ　やる瀬がないわいな　實にやる瀬がないぞいな

さつまサー　さつまと急いで押せど汐がサー
コリャサー　そさなで櫓がたたぬ

烏啼きでも知らしぞなものを　あけ暮れ
お前の事許り　あんじく

摘(つ)みやれ　おつみやれ　宇治(うじ)の里(さと)の茶(ちや)摘(つ)み

二十(はたち)はまだ木(き)の花(はな)ゝ廿(はたち)の人(ひと)の木(き)と煮(か)て

茶(ちや)と云(い)ふ字(じ)ーととゝえて紫伊予簾(いよす)おろして茶(ちや)を摘(つ)みやれ

六下り

安芸(あき)の宮島(みやじま)廻(まわ)らば七里(しちり)　浦(うら)は七浦(なゝうら)

七恵比寿(えびす)　ヨイ〳〵〳〵　ヨウ　恵つ　サア〳〵　エヽ　サノ

サツサ　ヒノヤロ　ハレハノサツサ　と　おひゝる

鳥(とり)かげに　ねづみちよろ〳〵して　あぶられる是(これ)も

苦界(くがい)のうさばらし　愚痴(ぐち)が飲(の)ませる　ひや酒(ざけ)は

しん気(き)　辛(しん)　苦(く)の　アヽ　しやくのたね

五月雨(さみだれ)や　空(ぞら)に一声(ひとこえ)　時鳥(ほとゝぎす)　晴(は)れておゝ出(だ)す

木母寺(もくもじ)の関屋(せきや)晴(はれ)れて綾瀬口(あやせぐち)牛田(うした)の森(もり)を横(よこ)に

見越(みこ)ゆる間(ま)もなく堀切(ほりきり)の咲(さ)くや與作(よさく)の花(はな)盛り

〽蓬莱に聞かばや伊勢の初便り恋の山田の
人おどし茶屋のおなごの前たれや結ぶ御縁
の神垣や逢の山々音の葉も取交せば
末変る ホンニ嬉しいけんじきん ヨウコウ行った
ぞいな起きあはれ今宵忍ばず チヨト瀬戸
迄もすかんたらしい様だ余可愛らし

〽時鳥自由自在に聞く里は酒屋へ三里
豆腐屋へ二里と云ふ在所でも粋なすいた
御方と暮すならば末は野随しもたれに
身は捨て草のにのし菊

〽田舎作りの籠生花がぐつすりぬれて水色の
龍田を生けて楽しも心のうちも嬉しくやらなたん一聲時鳥

「血ぞ出るも帰す夜は一つの愛以お方の為にと云ひ
泣いて別れて又御見しちよきかはかれんは
夜露に濡れて後は物うき独り寝するも薬が苦界の生年かくぶ
「すゑ恵比寿のうりもいはせ伏見にとり
ばちせたうます小判に金箔たてま
ぼしゆてはさいつちたはねのしおさをかへぞ
みどりあり

社頭の杉

「新しやの夢の色に明け初めてや早苗も
国民の直な心は年ふるし杉の木立の空に立つ
ひやにうしたき神路山あをむ内外の宮柱
さゞめく神楽琴の緒に睦月の神に指して
豊かなる常盤見渡せ二見の沖に昇る日の影

海濱の松

真帆片帆松をたよりに入る船も風が誘へば寄る身ぢやものを外の浦湾湾すかく美茂りやうつろう初日影さすか緑の色もふかくみさほは明ける二葉草

雲井棚引く春景色以ゞくの家の柱たる

若松オヤ若松様々エコレアドウシタイ枝もエ、コリヤ栄へてサア葉も茂げるエ、コリヤ葉も茂げるドント咲かずも葉も茂げる枝もエコリヤ栄へてサア葉も茂げるアレ聞かさんせ風が持て来て浮の手をしる

散りもせず咲きし残らぬ櫻春と云ふのもさくの事心に止めて忘られぬふりかけられた心忘れぬ

〽紅葉の橋は袂のゝ袖を垣根の言傳に
一寸見をばかゝさぎの霜もいつしか白々と
積る程なほ深草は雪を巡らす舞の手や　ヨイ／＼　ヨイヤサ
〽五月雨や池のまこもに水まして何れがあやめ
かきつばた定かる夫と吉原へ程遠からぬ水神
の離れ座敷の夕晴れに一寸見かはす不二筑波

〽ゆふべの風呂は上り場で此の腹帯をかゝえ
がみつけられて　サツテモ／＼　いやな人それたといふての
お腹を案じたさる見たちたきさに来たのが　レツ／＼
〽晴れて雲間にアノ月の影さし込む腕よ
入黒痣まだかはひ枕蚊帳の内いつか願ひ
もオヤ雷さんの引　きゝわけ

二人が仲はお月様其と粋な朧で吸付煙草の火打の盃よ話しも更けてゾツト身の夜寒の風は恋しみじしと惚れつたは夜も口の内

自分作りの籠花生がグッスリぬるゝ水の色龍田を生けて楽しむも心のうさも何処へやらたつた一聲ほとゝぎす

元日や田毎の日こそ恋しきと翁も若き人びいきも逢ひは互へ旧冬はだん〳〵又当年も明けまして睦月の歌にかづく歌つて目出度ふ遊ばふくつちやありやせん オーホン

勇まし や 柝の響く太鼓の音一寸手をを取り腹やぐら四十八手を取つくし アレ 場所がつきてはないかいな

筆の傘縫ひて待つ夜の蚊遣火 サット吹き
〳〵涼風 磯うつ波の粋な夜 女波
男波の夫婦づれも寝つかれぬ夜は思ほしさ
の寝られぬ時を思ひ出し

宵と口説のちらけた後で 啼いて通るや
時鳥 松の嵐も夢うち覚めて 後のおもかげ思はする

鳥ゆけるねづみ鳴きて ちぶらきどる是も
苦界そうきて情し 愚痴がのませる冷酒は
辛気辛苦の ちやく〳〵のた様

越後の国の角兵衛獅子 国を出る時親
子連 獅子をかぶって チヨイと立つて 首を
ふりまする 親父まじめて 笛を吹く

〽柳(やなぎ)ぐいは世(よ)を面白(おもしろ)う うけて暮(くら)すが命(いのち)乃くすり 梅(うめ)に
随(したが)ひ櫻(さくら)になびくその日しの風(かぜ)次第(しだい)うそも誠(まこと)も
義理(ぎり)もなく 始(はじ)めは粋(すい)と思(おも)ひども 日増(ひま)しに惚(ほ)れて
通(つう)愚痴(ぐち)になるひる寝(ね)は床(とこ)のうき思(おも)ひどうした
表裏(ひょうり)乃ひょうたんで 徒腹(あだはら)のたつ月(つき)じゃへ
〽きわぞはい遊(あそ)び乃早(はや)帰(かへ)り 丁度(ちょうど)よい闇(よ)に チヨイ些
来(き)て チヨイと 飲(の)んで チヨイと 寝(ね)て チヨイと 極(きま)りおは
わのきし せわしき ひけ乃鐘(かね)
〽どうぞ叶(かな)へて下(くだ)さんせ 妙見(みょうけん)様(さま)へ願(がん)かけ
切(き)れて帰(かへ)る道(みち)にも その人(ひと)に逢(あ)ひたい見(み)たい
顔(かほ)見(み)たいがホンのお許(ばか)りで先(さき)ァ知(し)ら無(な)イ・エ・縁起(えんき)
らしいじゃないかへ奈

来いと云ふたとて行うりようか佐渡へ佐渡は四十九里
ビックリシャックリ 波の上でもおじやるおじやるとゆふ
呼んで来る船や艪もある櫂もある アレハノサ エヤナコイ〳〵

おらが國にも名所が御座る君に木更
木礒訓松の葉 アレハノサ エートナ 辛苦うき
ねし アレ 雨宿り エートナコイ〳〵

酒と女は氣のくすり兎角浮世は色と酒
サ、チヨツピリつまんだ悪縁因縁ナマイダ〳〵
地獄極樂づうと行くにも二人連れお前の様な
美しいお方と地獄へ行くなら閻魔様でも
地蔵さんでもまだ〳〵〳〵〳〵鬼さへも

嵯峨の秋

〽さこそ心もすみぬらん／＼ 月も嵯峨野や
秋の色 千代のふる道露わけて 軒も信夫の
くつわ虫 峯の山風か 松風か 尋ぬる人のつま音か
思ひみだるゝ萩の戸を もるゝぞ床しき 想夫恋

〽橋本へつけるや 雪のもやひ舟 簾かゝげて
二階のまね 頼母もしら雀

〽吉野山峯の白雪ふみ分けて 入りにし人の跡ぞ床しき

〽舟じや寒の翁ぞ 行ゆうしやんせ わが着替の代の小袖

〽夜の雨もしや来るかと 畳ざん 髪で蛙のまね
おひも虫か知らせとも びの丁字も飛んだ
今時分気まぐれさんすな 五十年の夢

〽阿じさゐの花いろけれど 七度変る巡り／＼て元の色

菜の葉

可愛いと云ふ事は誰が初めけん 外の座敷は
うわの空 元の様なる 志るす心の ほとゝぎすは浮く
様ならば文みも別に変らぬ様なる思ひ廻せば
勿体ならで言葉さげたや 思ふ事 菜の葉
に止まりし 蝶の夢

えなぶつま

〽旅の重荷乃ナア島の内 送り迎ひにつらき駕乃
誰でかうとして おやす 棒鼻に くゝりつけたる
提灯の日柄の約束で来たサー 高く挽いて
色の道つらぬ立てる 立て馬の息づかひをつまぬ
楽しみ エーサア サツサ おせく 夢の通路 ナアーイ

縁がありゃこそ ふとした事で 苦労もする
させもする 色の世界じゃやになって 苦の世界

風に恨みは 待合の 軒端にそよぐ しのぶ草
そよとの風も 人きんに 心を奥の 四畳半

むつごとして 帰るさ門の 青柳に 曇りし胸を 晴る
り
雨や又 晴れて行く月の 影 あらば 朧にしてほしい

時は今 天が下知る 五月かな おさわぎなさるな
御大将と 明智光秀 之を読む 森の蘭丸
早たすき シテ 陣鐘 陣太鼓 ブウドン ヂャン

石川や 浜の真砂は つきるとも 世に白浪の 種は
つきまじと 石川五右衛門 之を読む 西国巡礼
コレほうしゃ エイ と 手裏剣 きやうで 受け チョン〳〵 チョン〳〵

和田の泊漕ぎ出て見れば久方の雲井にまがふ
沖津白浪と法性寺入道先の関白太政大臣
丹を読むさつても長いお名前じやしよせん
暮にはとまれぬ以まづ春長に
澪さくに三ツの鱗名も高時が浮れ天狗の
舞ひ遊ぶ祇園豆腐や田楽舞にさすが日本に比類なき

和歌の浦には名所が御座る一に権現二に玉
津島三に下り松四に塩浜よ天の橋立切戸の
文珠文珠さんはありがたけれども切戸と云ふ字が
気にかゝるサツサ何としようどうしようぞいな

老松（常磐津）

そもそも
松の目出度事萬木に勝れ十八公の

さてもひ千秋の緑をまして 妙の色を見す
しんの しくはうの御狩の時天俄にかき曇り大雨
しきりに降りしかば帝雨をしのがんと小松の蔭
寄り給ふ此の松たちまち大木となり 枝を垂れ
葉を重ね木の間すき間をふさぎて雨を
洩らさゝりしかば帝 大夫と云ふ爵を送り下し

給ひてより 松を大夫と申すとかや 斯様目
出度き松ヶ枝に巣をくふ田鶴の齢をば君に
さゝげて御子孫は亀のまんぼう古川の流れ
絶へせぬ金銀珠玉ドら〳〵と みくらのうちへ
治まる家こそ目出度けれ

山姥（清元）

〽すゞ何しろ引(ひき)の山(やま)はさて四季(しき)に眺(ながめ)も面白(おもしろ)や
梅(うめ)が笑(わら)へば柳(やなぎ)がまねく風(かぜ)のまにまに さわらびや
手(て)を引(ひき)添(そ)ふて弥生山(やよいやま)つゝらう花(はな)の仇(あだ)ざくら〽桃(もゝ)
菊(きく)また山吹(やまぶき)も見(み)る内(うち)に春(はる)すぎて早(はや)卯(う)の
花(はな)とはながつみ〽そしてひやし菖蒲(しやうぶ)やかきつばた
ほうそれと時鳥(ほとゝぎす) カシ 夕立(ゆうだち)に濡(ぬれ)しのぶ涼風(すゞかぜ)が

〽(三下り)雁(がり)がとゞけし玉章(たまづき)は小萩(こはぎ)のたもとかるかやに
返事(へんじ)紫苑(しおん)も朝顔(あさかほ)のかくれ咲(さ)きあるうらみわび
露(つゆ)にも濡(ぬれ)てしつぽりと伏猪(ふせゐ)の床(とこ)は菊(きく)の森
ヨイヨイヨイヤサ〽さいやさへ行(ゆ)く初(はつ)しぐれ松(まつ)
も杖(つへ)つく老(おひ)の坂(ざか)

先つ頃心するまゝに著せし寄本 情様の好評を得たるに尤も親しき友等のすゝめに任せ 内容を改め 續編とはなしぬ

戊辰 初夏

たけ次 識

大正十二年二月二十日 初版發行
仝 年七月五日 二版發行
昭和三年六月二日 印刷
仝 年仝月二十五日 三版發行

不許複製

定價金壱円貳拾錢

編輯筆者 藤廻家たけ次

發行兼印刷者 山形市七日町二七五番地 張城朋吉

發賣所 山形市七日町旭座前通 谷野屋書店

終